

---

# 水面をゆらゆら漂って

subaru.h

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水面をゆらゆら漂って

### 【Nコード】

N7412B

### 【作者名】

subaru.h

### 【あらすじ】

大学4年の8月、西山心にしやましんは一つの決心をした。それは自分と向き合うため、生きて行くための決心だった。

## 00・夜と夜明けの狭間で

眠れない。

西山心にしやましんは夢と現実の狭間にいた。

眠れない？

違う。

正しくは眠りたくないだ。

眠ってしまったら悪夢と言う名のありきたりな恐怖に捕まってしまう。

西山心が悪夢に災なまれるようになったのは17の時からだ。

以来四年間それはまるで呼吸をすることのように当たり前前に彼の生活に住み着いた。

時間はAM2:00

世界が最も孤独な時間だ。

まるで世界中に誰もいないかのような静けさ。

これが都会なら幾分状況は違うだろう。

ここは静かだ。

心の家は学生達が住んでいる街から少し離れた所にある。

各公共機関へのアクセスの不便さと、周りの何もなさが2DKのマンションを奇跡的な値段で使わせてくれている。

心は灯りのない部屋で虚空を見つめた。

必要以上に広い部屋が彼の心を小さく小さく押し込める。

孤独だと知らせる。

夜の心は音楽だけを救いに行っていた。

Radiohead、The White Stripes、Oasis、BECK…偉大なる21世紀のミュージシャンよ。

いずれ過去の偉大なるミュージシャンとして語り継がれるであろう彼等に嫉妬と尊敬を抱きながら心は囁く。

心の歌声はもの悲しく響く。

I will see you in the next life

心は気付いていなかった。

それが誰かに歌った歌であることを。

AM4:00空がわずかに白み始める。

心は眠りの世界に落ちていく。

空が明るくなって初めて心は心を許す。

悪夢と言う名の運命に抗うことを止める。

これは彼の物語であると共に、彼に携わる全ての人の物語である。

そこに素敵な結末などないかもしれない。

幸せな世界があるのかもしれない。

世界は可能性で出来ている。

歌声は静かに夜に馴染んでいく。ただ、どうか見守ってほしい。

これは知らずにはいられなかった者達の物語なのだから。

## 01・心と信次

西山心は大学の一限目の時間を大きく寝過ごした後で目覚めた。

心は体中に汗をかき、悲壮な面持ちで起き上がる。

心のそんな姿を誰一人知らない。

心の生活の中で夢に脅える彼と、日常を過ごす彼は全くの別人なのだ。

心はグループの中では必然的に中心にくるようなタイプで、皆から愛されていた。

彼の人柄と率直さは他に類をみないものであり、また彼は何より悪を憎んだ。

しかし彼はそんな自分と、夢に脅える自分の境目があいまいになっていくのを感じていた。

「俺は何かに脅えて暮らすようになるかもしれない」

心は彼の友人である信次にそう打ち明けたことがある。

「女に恨みでも買うようなことをしたのか？色男め」  
あのとき信次はそう答えた。

話はそこで途切れ、心は今まで二度とそのことを口にする事はなかった。

時計はAM10:00を示す。

心は見るわけでもないテレビをつける。

そして台所に移動しコーヒーを作る。

今日はまだ優しい悪夢だった。

心はコーヒーを入れながらそう思った。

彼の悪夢には大きく分けて2種類のものがある。

一つ目は彼自身が大きく傷つけられる夢。

そして二つ目は彼の精神が大きく傷つけられる夢だ。

悪夢の中で彼自身が傷付けられるとき、その痛みは現実よりも強いものだ。

彼は日常的に腕を折られ、爪をはがれ、喉を切り裂かれる痛みを経験していた。

悪夢の中で彼の精神が傷つけられる時、夢で涙を使い果たし、現実ではその欠片も見付からないほどだ。

彼は日常的に恋人を奪われ、成功を失い、友に裏切られる人生を経験していた。

勿論それらは夢だ。

しかし現実と夢を区別するときに、鮮明さ、リアリティを引き合いに出すなら彼の夢は夢でなく、彼の日常は夢となる。

悪夢から解放され、コーヒーを飲むとき、彼の心は安らぐ。

ここで彼の悪夢について語るのはやめよう。

なぜならそれは呼吸することと同じ様に、心の人生に当たり前にあるものだからだ。

いつか呼吸についてを語るとき、心の悪夢も語られるだろう。

AM 10:32

信次から電話がかかってくる。

一限の授業が終わったのだろう。

心はゆっくりとした動作で携帯電話に出、今まで寝ていたようなフリをした。

「おはよう寝ぼすけ！！代返しておいたぞ！」信次は言う。

「ありがとう、お前こそ俺の親友だ」心は本心からそう言った。

「しかし心、人生とは無情なものだ…往々にして与えられるだけの人生とは長く続かない。そうだろ？」信次は芝居がかったセリフを一気に言うと言った。

「俺も心の親友でいたい。親友とは助け合うものだ。そうだろ？」  
いつもと変わらない会話。心はここが現実だと強く実感する。

「実にその通り。そしてお前は回りくどい。さあ用件を言え」心は話の要点を真つ先に知りたがる性格だ。

それ故、信次は日常的に周りくどい話し方をし、心をからかっている節がある。

しかし信次はそれ以上もつたいぶらずに用件を言った。

「今夜、心の家泊めてほしい」

用件を率直に言ったことも、信次の言葉も心にとって予想外だった。

「全然構わないぞ。しかしどうしたんだ？何かあったのか？」心はいつもと違う様子の信次を心配した。

「まあそれは追い追い話すよ。これからそっちに向かうけど何か買つていこうか？」信次は話をそらす。

心も追い追い話すと言ったことを追求するほど野暮ではない。

「じゃあミネラルウォーターと弁当買ってきてくれるか？」心は言う。

「了解。弁当は適当でいいな？水はナント力還元水がいいか？」

「ワオ」心は大袈裟に反応する。

「水はエヴィアンを頼むよ」

「了解。しかし水を買うなんて贅沢なやつだ」信次はあきれた声を

出す。

「今時水道水を飲むやつなんているのかね？」

「ワアオ。どつかで聞いたセリフだ。ともかく昼飯時にはそっちにつくからな。よろしく！」そう言うと信次は電話を切った。

「さて…。今夜は徹夜だな」  
心は誰に言うでもなく呟く。

つけっぱなしのテレビからまだ捕まらない連続殺人犯についての報道が流れる。

ありきたりの悲劇。

隣人トラブル。

親が子を殺し。

子が親を殺す。痴情のもつれ。

イジメ、ジサツ、キヨウキ、ダレカノサケビ…

僕達の日常はありふれた異常から隔離されている。

誰もがそう思っている。

ありふれた悲劇はありふれた日常には介入してこない。

何故だろう。心はそのときニュースを見てそう思った。

それはとても嫌な予感だった。

### 03・止まない雨で世界が泣いている

心は信次との電話を切った後、雨を見ていた。

灰色の雲と雨のリズムが世界をもの悲しくさせた。

CD、文庫本、楽器。

心の部屋にはそれ以外の娯楽はなかった。

彼は雨を見ることに飽きると目を瞑った。

不意に心は3年前の2月を思い出した。

部屋の中を漂う無気力な何かに捕まりながら、暮れていく日を眺めていたあの日。

心は何か大切なことを忘れていた。

捕まえないければいけない記憶の尻尾だけが、一瞬心の前を横切る。

雪の街、太陽の下、ひまわり畑、海の深く…

心はその尻尾を捕えようとする。

しかし記憶の旅路を踊っても、名前のないその記憶は見付からなかった。

鍵を掛けたんだ。

その記憶が掘り起こされないよう。

しかし、今僕はそれが知りたい。

矛盾。

心は自分の心が借り物の器のように感じた。

誰かが色彩の無い曖昧な絵を微笑みながらくれるような…そんなものの悲しい意識の渦がいつも心に潜んでいた。

どれだけ瞳を閉じていただろう。

鈍い振動音が心をアパートへと戻す。

アクアブルーが点滅している。

振動は鳴り止まない。

数秒の後、心はそれが電話の振動であることに気が付いた。

心は振動を殺すためベットに手を伸ばし、枕元から携帯を取った。

電話は心の家庭教師の生徒のレナからだった。

心は大学に入ると同時に家庭教師として働き始め、その評判のよさから常時4〜5人の生徒を受け持っていた。

レナは心が2年前から受け持っている生徒だ。

後2ヶ月すると彼女は最上級生となり、受験と言つ呪縛に捕えられてしまう。

彼女は心のアパートで授業を受けることも多く、何かと心を頼りにしていた。

「先生、今平気ですか？」電話に出ると快活なレナの声が響いた。

「どうした？」

「今日先生の家で勉強を教えてほしいんだけど」

「構わないけど今日は信次が泊まりに来るよ」心がそういつとレナはひどくがっかりした声で言った

「うわーん、それじゃああんまりお話しできないじゃいですか」

敬語を使ったり使わなかったり。一貫性がないのが逆に親近感をわかせる。

「何か信次も訳ありな感じでな、気にせず来ればいいじゃないか。信次も喜ぶぞ」

レナと信次は何度か顔を合わせているのだが、レナの明るい性格と容姿のかわいさから信次はレナのことを気に入っていた。

「ううん、今日は我慢します。」

「そうか、ゴメンな」

「ああ…やっぱり前言撤回、ウチでかてきよしてくれませんか？」レナは驚くべき早さで前言を撤回した。

心はしばらく考えるフリをしてその申し出を受け入れた。

「もともと家庭教師は生徒の自宅でやるものだ」心はもつともな意見述べその電話を切った。

いつのまにか雨は止み晴れ間が射している。

ほどなくして信次が心の家にやって来た。

しばらく他人の家で放置されるとも知らずに。

「弁当買ってきたぞ〜」信次はマヌケな声で言う。

「ははは…」心は苦笑いしながら答える。

レナの家で出してくれる飯は格別にうまいのだ。

あの弁当は夜食になるな。

心は晴れ空のような気持でそう考えていた。

そして思った。

この世界には自己探索の旅に出るためには必要な時間が無さすぎるな。

素敵な絆が近くにあると明るい方に引つ張られてしまう。

だからそれが無い夜は恐ろしい。

それでも仲間は素晴らしい。

そう思ったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7412b/>

---

水面をゆらゆら漂って

2010年11月23日16時44分発行